



上/ 施主からの要望を考えているときが一番好きだと語る渡部。
下/ 卒業設計で作成した保育園の模型。

渡部は入社以来、マンションや社宅など住宅系建物の設計を担当してきた。八年の経験のなかでも印象に残った物件があるという。「入社四年目で初めて設計から工事監理までをメインで担当したマンションです。今までは現場の施工担当者と細かい確認をしたこともなかったのですが、主担当者になると自分が決めることが多くて驚きました。周りの人たちに教わりながら無我夢中になって進めていったのを覚えています。工程が進む中、迅速に判断することができず現場から怒られたこともありましたが、現場では、予想外の出来事に対しても慌てず素早く判断しなければならぬため戸惑うこともあったが、自分の考えがカタチになっていく

「私の父は個人で設計事務所をしており、幼い頃から設計という仕事に馴染みがありました。高校時代、父から『これからは建設業界で女性がどんどん活躍していくべき』と言われ、建築を学ぶことに賛成してくれたんです」

設計の仕事はずっと続けたい

大学時代から女性の社会活躍を意識し、意匠設計をずっと続けていきたいと考えていた今号の小町。担当物件を通して、相手に伝えることを意識して働くようになった。今は会社内の働き方の仕組みについても考えを巡らせている。

父に背中を押されれ大学では建築学科に入学。在学中から卒業したら設計の仕事の続けたいことを決めていた。「卒業設計では自分が将来、結婚後に子育てをしながら働き続けることを想像して、親子で楽しめるような保育園を設計しました。京都に敷地を設定して、現地で既存の建物配置や人の流れなどの調査を行い、計画建物を街並みに落とし込んでいきました。未来を想像しながらの設計はとても楽しく、自分の考えをカタチにしていくことにやりがいを感じました。大学院に進学してからも、職住の近接と分離のどちらが仕事と子育ての両立に適しているかなど、都市

考え、判断し、伝える

における保育所の配置について研究しました。仕事と子育ての両立という社会テーマに真正面から取り組み、その解決策を考える。都市のあり方や人々の働き方について丹念に調べ、建物をつくりこんでいく。渡部は想いをカタチにしていく設計の面白さに改めて魅力を感じた。「自分の考えたアイデアを丁寧に検討して一つひとつ積み重ねていく設計をやりたいと思っていました。設計したものが実際につくられるところまで携わり続け、事業者と現場を繋ぐ役割も果たしたくゼネコンの設計部を選びました」二〇一〇年、渡部は株式会社鴻池組に入社した。

輝け! けんせつ小町

意匠設計者

渡部菜津子

株式会社鴻池組設計本部
建築設計第2部設計課建築設計第1グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning

私が建設業界に入った理由

カタチにすることに魅せられて

my style



野球観戦に行くときに持参する応援グッズ。

野球観戦が好きです。出身が愛知県の名古屋市ということもあって中日ドラゴンズをずっと応援しています。今は名古屋ドームになりましたが、私が小さい頃は名古屋球場で試合をしていたんです。ドームより球場の方が選手との距離が近くて臨場感があり、その雰囲気がとても好きでした。球場が家の近くということもあり、両親とよく行っていたのが今でも忘れられない思い出なんです。



右／「渡部とは約3年間一緒に働いていますが、まわりをうまくまとめて、てきぱきと仕事をこなすので頼りになります」(碓氷部長・左)

上／仕上げを1つ決めるにも様々な意見が飛び交い一筋縄ではいかないと渡部は話す。

下／現在担当している分譲マンションの現場での進捗確認。取材時はパンフレットなどの販売資料も作っており、各所の確認を入念に行っていた。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

人に伝えるという意識を常に持つ

るかを考えることが設計の仕事の醍醐味だ。

「この仕事は事業者や現場、設計部のメンバーなど様々な立場の人と接するので、それぞれの考えを理解したうえで提案しないと次に進みません。相手がどんなことを思っているか考えてから発言するように心掛けています」

これからの働き方

同期に女性社員が三名いたが、渡部が配属された設計部では久しぶりの女性の新人社員であったという。

「私は女性が少ないことを気にしませんが、ただ、むしろ周りの方がどう接しているか戸惑っていたように思います。そこで、自分のキャラクターをこちらから発信していくことが大事なんだと思って、『これをやりたいです』と意思をはっきりと伝えるようにしていました」

性別を意識するのは今まで女性がいる職場環境に馴染みのなかった世代なのかもしれない。働く女性が増えてきた今日、性別で判断するのはなく、その人がどんな考えを持っているのかしっかりと理解することが必要ではないだろうか。

「ダイバーシティや働き方改革について社内でも話し合うことがあるのですが、注目されているのは労働時間の短縮です。設計はよりいいものを生み出していく仕事なので労働時間が長くなりがちです。設計期間は事業者との打ち合わせ

ことにやりがいを感じたと渡部は語る。

「現場で覚えることや仕事のスピード感についていくので精一杯で、うまく伝えるというところまで気がまわりませんでした。そんな時、会社の上司から『日々の打ち合わせからプレゼンテーションなんだぞ』と言われたことが心に残っています。日々の業務でつくる資料や普段の話し方まで、常に人に理解してもらおうことを意識するのが重要だと教わり、それはすべての仕事に通じることとして今でも心掛けています」

初めて責任者を任せられ試行錯誤を繰り返していた渡部だが、上司からの一言で仕事の軸を意識しはじめ働き方が変わっていった。

相手の立場で要望を引き出す

「事業者の要望を正確に把握することが難しくもあり、やりがいでもあります。言葉にはカタチがないので、そこに込められた想いを汲み取るには感覚的な判断も必要です。聞いた話をそのまま検討してもスムーズにいくものではなく、何を意図しているのか何度もすり合わせていかなければいけません。そういうやりとりを経てお互いの想いが合致した瞬間は、なんとも言えない達成感があります」

数々のプロジェクトを経て経験を積んでも、相手が思い描くイメージをカタチに表すことは難しい。だからこそ自分なりの考えや工夫を組み込んだり、相手の想いをいかにして引き出せるかを考えることが設計の仕事の醍醐味だ。



「デスクワークが多いので、行き詰ったときは気分転換に同じフロアの女性社員で集まって雑談をします」(渡部)

profile



わたべ・なつこ●1984(昭和59)年、愛知県生まれ。設計士であった父の影響もあり、幼い頃から設計職に関心を持つ。大学では創造理工学を専攻し、2010(平成22)年、(株)鴻池組に入社。集合住宅や社宅、学生寮といった住居の設計を数々行い、2016(平成28)年4月より中央区の分譲マンションの設計監理を担当している。

せで忙しくなり、工事が始まれば現場での対応が頻繁にあります。働き方を柔軟にして時間を短縮できないか日頃から考えています」
 会社全体で働き方を変えようと大きく動き出しているなか、渡部はタブレット端末をはじめとするITツールに期待を寄せている。
 「情報を伝える早さ、共有のしやすさが改善され、打ち合わせの時間を短縮できるようになりました。持ち運びもできるので移動中にメールの確認ができ、空き時間の活用もできますしね。考えることはどこでもできるので、働く場所がフレキシブルになればいいなと考えています」
 学生時代からこの業界でずっと働き続けていくと心に決めていた渡部は、相手の視点に立ちその想いを知ったうえで、自分なりの提案を丁寧に伝えるという働き方を見出した。父親の言葉を胸に、働き続けるための環境整備にも尽力している渡部の表情は生き生きとしていた。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと